

## 「プラズマ分光分析研究会」の発足にあたり

不 破 敬 一 郎

1955年にオーストラリアのA. Walsh博士が、フラウンホーファーの昔に返れとさげんで、近代原子吸光法の幕明けとなった。一般に普及するまでには、それから10年かかり、我が国において盛んになるのに、更に2,3年を要した。その後数多くの原子吸光装置が開発され、現在では日本中に数千台が普及し、品質管理、環境、保健その他の微量金属分析の分野で活躍している。これ以上分析方法を開発しないで十分であろうと感じたのは筆者だけではないであろう。

米国のV. Fassel教授は、この間原子発光法の改良をつづけた。元来が発光分光化学者であったから、原子吸光法の発展普及には多分心良からず思っていたにちがいない。原子吸光法が急上昇していた頃のシカゴの学会において、炎光発光と炎吸光のそれぞれに適している元素名を一枚のスライドに列挙して、希土類元素を数個入れて前者の方が数が一つ多いことを強調していたのが印象的であった。ここ数年間ICP発光法が、同じその人々の努力により急速に進展して、1974年のFasselの論文の初めには、分光分析のルネッサンスがおとずれたと書かれている。キルヒホフ、ブンゼンの発光法の昔に返ったという意味である。分光学という自然科学の原点の分野におけるこのような歴史の繰り返しは重要な意味をもっていると思う。

かくして、一元素ではなくて、多元素を同時に高感度で測定する装置が、プラズマ発光法において実現しつつある。装置の開発も活発で、正に20年前の原子吸光法の開発期を思わせる。

当時、日本分析化学会の中に原子吸光研究懇談会ができて、講演会その他の普及活動が開始され、現在でもその活動はつづいている。同様の所謂“discussion group”がプラズマ発光法のために必要であるのは当然であり、関係者の要望が急速に強くなってきた。原子吸光懇談会の中でやってもよいのではないかという説もあったが、吸光、発光と盾の両面を銘打っている以上、それは適当とは思われないので、差し当り独立の「プラズマ分光分析研究会」を発足させることとした次第である。

丁度期を一にしてICAS(国際原子分光学会)とCSI(ヨーロッパ分光学会)が今年9月東京で行われ、両者の統一をdeligation meetingで議論することになっている。原子吸光でスタートした前者とより一般的な後者が、“analytical spectroscopy”の名のもとに合同しようという考えである。

われわれのプラズマ分光分析研究会も、これと同じような意味で、将来はより大きく、より広く発展し、研究者、ユーザー、機器メーカーのすべての関心のある人々のために真に有益たらんと希求するものである。

(東京大学教授、「プラズマ分光分析研究会」会長)